

宮城已知子さん

1926(大正15)年4月12日生まれ
当時の本籍地 沖縄県
瑞泉学徒隊(県立首里高等女学校)
第62師団野戦病院



沖縄

●1945(昭和20)年3月25日 第62師団野戦病院に入隊

3月26、27日に防空壕で卒業証書もらった。戦争でどこに行ったかは分からない。学校では防空壕に行ったり来たりしながら、看護教育を受けていた。傷の手当、下の世話など。

●1945(昭和20)年4月1日 米軍上陸

上陸して来たらどんどん進んで、嘉手納は高射砲部隊が居たけど、こっちが一発撃つと、何十発も返ってくる。逃げたら勝ちとばかりに、南部へと兵隊は逃げていった。

戦争がやってきたら、自分たちも看護教育は途中でほったらかしにし、壕へと移動させられた。ひめゆりは先生が引率したが、私たちはなかった。

4名を治療班、4名が作業班。今では考えられない話だが、つるはしで土を掘って、夜に土を持って畑に捨てる役割。早く掘れ、と兵隊にせかされた。一生懸命やっても女なので進まない。それでも一生懸命やった。2～3日で激戦があったようで、負傷兵がどんどん入ってくる。

●怪我をした人が入らなくなって、トラックでナゲーラの壕(現南風原町)に運ぶ。兵隊が万が一に備えて、手榴弾を2つくれた。「これで何するんですか？」と聞くと「一発は敵に投げて、もう一発で自決しなさい」と言われた。夜中10時ごろに撤退。途中で友達と会って、大変だったと話をしていた。今頃になって防空壕を掘るのかと思っていた。ナゲーラは壕が満タン。戦争に行つて怪我をした人がみんな来る。野戦病院は足の踏み場がないほどだった。そこに入れるしかなくて、押し込んだ。

足の踏み場もない真っ暗闇で、後から来た人が土壁を背中にして、ただ座っているだけ。5月に本土から食料などが運ばれたらしいが、途中で沈められて、物資が不足していた。負傷兵をただ座らせるだけの対応。

日にちが経つと、傷口に蛆がわく。蛆がわくと、傷口が痛い。看護婦さん蛆を取ってと懇願される。1匹、2匹ではなくて、傷口全体にあふれている。薬もないから、どうしようもない。包帯が乾いて、そこから蛆がわく。取ってあげる余裕も、灯りもないからどこの兵隊が言っているかも分からない。隣の友達顔も分からない。

食事が無い。看護婦さん、おにぎりひとつ頂戴と言われるけど、自分たちの分もないので、あげることもできない。何も施しようがない、水をくれとも言われるが、この地域は水が遠くにしかなくて、どうしようもない。聞きっぱなし、しまいには「しずく」が落ちてくるのを飯盒のふたで貯めて兵隊にあげていた。湯のみの半分しかたまらない。唇を濡らす事しか出来ない。水を我慢した。食べ物2～3日に1個はあったかね。おにぎりくれたら死んでもいいと懇願された。あっちから、こっちから言われた。

ナゲーラの壕は地獄。排尿は全部座ったままするので、200人が血だらけで、蛆が沸いている。大変でしたよ。

●1945(昭和20)年5月下旬～6月

敵が寄せてきて、撤退になった。南部の武富(たけとみ)に行くことになる。よその学校は兵隊を担がせないが、ここは2人で1人を引きずって、負傷兵を運んだ。命令だから仕方がない。ただ、歩く。

兵隊は皆切り込み隊、「兵隊さん、私も連れて行ってください」と懇願したが、誰も連れて行ってくれない。「自分で自分の始末をしろ」と言われた時は、どうやって死ぬばいいか分からなかった。壕の入り口で大の字で寝て、艦砲射撃で死のうと思った。神様、一発で死ぬますようにと寝ていた。

死ぬ道がわからないから、壕に戻って真っ暗闇に入って、一夜は明かせるかと思い込んだ訳です。暗くてよく解らない。そしたら死体の山。ここに居てもすぐやられるよ、とそろそろ中に入って反対の出口から出ようとしたら、火炎放射器をやられた。敵が来たよ、どこに逃げるね。戻ろうとすると毒ガスみたいな臭い煙がきて、どこにも行けない。

友達は自殺しようと思った。首に包帯を巻いて、首を巻いている。こんな苦しいことするよりは、死んだ方がいいと首を巻いている。死ぬ前に腹いっぱい水を飲もう、後で一緒に死ぬから移動しようと説得して外に出た。前後左右4人で囲まれた。手を上げる以外なくて、降参した。連れて行かれて、捕虜になりました。(取材日:2011年2月4日)